

しんさい ぶんかざい 震災から文化財を守りつぐ人々

これまで日本人は、何度も大きな地震を経験してきました。その経験を、様々な形で後世に伝えようと努力してきた人々がいます。先人の思いや歴史を重んじ、未来につなげていくことの大切さを考えましょう。

1 仙台城石垣の復旧工事について

仙台城は、江戸時代のおよそ260年間に、10回以上の大きな地震を経験しました。大地震が起こるたびに石垣が被害を受け、修理工事を何度もくり返してきました。

東日本大震災でも、本丸跡の石垣が約60mにわたってくずれ落ちるなど、大きな被害を受けました。伊達政宗が築いた仙台城は、江戸時代を代表する城跡として高く評価されています。震災後すぐに、仙台市と国が協力して復旧工事を始めました。

本丸跡の石垣は、地震により3か所で大きくくずれました。復旧工事では、約5,000もの石を一度解体して、積み直しました。その際、コンクリートなどは使用せず、石垣が構築された当時の伝統工法によって行われました。可能な限り、もとの位置に石を戻して復旧させていきました。以前に行われた石垣積み直し工事にもなう発掘調査では、地震でくずれ落ちた古い石垣を再利用して背後の土の圧力



震災直後の様子 (平成23年3月)



復旧工事終了後 (平成27年2月)

を受け止めたり、はい水のための施設を加えたりするなど、高度な技術で石垣の強度を高めていたことも分かりました。

復旧工事は2012 (平成24) 年から3年かけて行われ、2015 (平成27) 年2月に工事の全てが終わりました。

—仙台城石垣の復旧工事を終えて—

仙台市教育委員会文化財課 (現在) 千葉 昂太 先生の話



東日本大震災からの復旧工事では、石垣以外にも江戸時代から伝わる伝統工法に基づいて作業をしました。例えば、大手門北側土塀は、これまで表面にモルタルがぬられていました。しかし、今回は土壁とシックいを使って修復しました。昔からの技術を用いることで、限りなく江戸時代の築城当時の仙台城跡に近付けて復旧させることを目標にしました。工事に関わった方全員が、一生けん命に取り組みました。

仙台城の石垣は、築城から現在まで、何度も大きな地震の被害を受けました。その度に、この石垣を守ろうと努力した人々がいます。伊達政宗が築いた仙台城。その石垣は、歴史的な価値のある文化財であるとともに、私たちが住む仙台市の大切なシンボルです。先人のメッセージを受け取るとともに、今回の修復に関わった私たちの思いも、次の世代につないでいきたいと考えます。

2 地名が伝える先人のメッセージ

地震などの自然災害を乗り越えようとした先人の知恵は「地名」や「言い伝え」からも読み取ることができます。

若林区霞目には、「浪分神社」があります。過去に経験した津波の被害を、現代に伝える神社です。1611 (慶長16) 年に起きた、慶長三陸地震の際に、津波がこの神社のある場所で2つに分かれたという「言い伝え」が残されています。災害の大きさを後の世に伝えようとした、昔の人のメッセージ、みなさんも発見してみませんか。



浪分神社